

一般県道鮎立恩地線改良事業に伴う

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

なか おき い せき
中 筋 遺 跡

1992

岐阜県八幡土木事務所

財団法人 岐阜県文化財保護センター

序

「日本一住みよいふるさと岐阜づくり」を合言葉に、県内各地域で様々なプロジェクトが実施されています。しかし、開発によって魅力的な環境が創出されていく一方で、埋蔵文化財の破壊が進んでいることも事実です。その際、失われていく文化財を後世に伝えていくことは、今を生きる私たちの義務であります。それができてこそ遠い未来までも「ふるさと」であり続けることができるのです。そのためには、皆さんのご理解が何よりも必要であります。今回の調査の一番の成果は、地元の方々の興味・関心を喚起できたことかもしれません。調査は秋から初冬にかけて、気候的にはよい時期に実施できました。しかし寒い日もありました。その中で終始熱心に調査に従事していただいた地元の方々、また、発掘調査から報告書の刊行に至るまで暖かくご支援・ご指導いただいた八幡土木事務所・白鳥町役場・白鳥町教育委員会・ならびに地元関係者各位・関係研究機関の皆様方に心から感謝申し上げます。

今回の調査範囲内では、残念ながら遺物包含層は一部を除き確認されませんでした。しかし、反面で県道改良事業が埋蔵文化財の破壊につながらなかったことは、幸いであるとも考えられます。本書が文化財保護および学問の進展に寄与することができれば幸いと存じます。

平成5年3月

財團法人 岐阜県文化財保護センター

理事長 吉田 豊

例　　言

1. 本書は岐阜県郡上郡白鳥町大字阿多岐字中簇に所在する「中簇遺跡」(岐阜県遺跡地図G15 S06383) の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本調査は一般県道駄知恩地線改良事業に伴うもので、岐阜県教育委員会が岐阜県八幡土木事務所より委託を受け、財團法人岐阜県文化財保護センターが実施したものである。
3. 現地調査は平成4年10月19日より11月25日までの間実施し、整理作業・報告書の作成は平成4年10月19日より平成5年2月25日までの間実施した。
4. 調査にあたっての体制は次の通りである。

理 事 長 吉田 豊

調 査 指 導 岐阜県教育委員会

調 査 課 長 西村 覚良

調 査 係 長 只腰 正知

調査担当者 川部 誠・長屋 幸二

事 務 局 事務局長 山崎 春夫

総 務 係 長 小林 哲夫

5. 発掘調査・遺物整理・報告書作成にあたって、上記担当者のほか、下記のセンター職員が協力した。

北洞勝臣・宇野治幸・各務光洋・安江祥司・千藤克彦・藤田英博

6. 報告書の執筆は長屋が担当した。

7. 本発掘調査に際して、阿多岐区長をはじめ地元の方々、岐阜県八幡土木事務所・白鳥町教育委員会など関係機関の多大な協力を得た。また、調査および報告書執筆にあたって、田代憲次白鳥町教育委員会生涯教育課課長補佐等地元研究者諸氏に周辺で表採された遺物を実見させていただいた。

8. ^{14}C 年代測定は(株)パレオ・ラボによる。また、同社の藤根久氏にも多大なるご教示を得た。

9. 火山灰の検出・観察を京都フィッシュントラックの檀原徹氏に依頼し、多大なるご教示も得た。以上の方々に感謝の意を表します。

10. 発掘調査作業および整理作業には、下記の方々の参加・協力を得た。(順不同)

木下一枝 木島太美枝 清水ふ志子 下島ふ志子 田島富貴子 田中久子 溝畑さよ

山口美代子 山越敏光 和田光枝 竹中栄子 和田房枝 坂井由賀子

11. 本書に報告した遺跡の記録類、および出土した遺物は岐阜県文化財保護センターで保管している。

目 次

I . 調査に至る経緯.....	1
II . 位置と環境.....	1
III . 調査方法と基本層序.....	4
IV . 遺構.....	9
V . 遺物	
1 . 遺物の出土状況.....	10
2 . I 層出土の遺物.....	11
3 . III 層出土の遺物.....	13
VI . まとめ.....	14
1 . 調査の概要	
2 . 下呂石のありかた	
3 . 遺跡の年代	

挿図・付表目次

- 1図 遺跡周辺の地形
2図 中筋・中筋表面採集遺物
3図 平成4年度中筋遺跡トレンチ設定図
4図 中筋遺跡地層柱状図
5図 第5トレンチ炭化物集中部
6図 I層出土の遺物
7図 第5トレンチIII層出土の遺物
表1 各トレンチ毎の出土状況

写真図版目次

- 図版1 調査区遠景（南から）
第1・2・3トレンチ
図版2 第3・4・5トレンチ
第5・6トレンチ
図版3 第5トレンチ完掘状況（北から）
第6トレンチ完掘状況（北から）
図版4 作業風景
第5トレンチ炭化物集中部
図版5 中筋遺跡表面採集遺物
I層出土の遺物
図版6 III層出土の遺物
第5トレンチ東壁セクション

I 調査に至る経緯

昭和51年に作成された岐阜県遺跡地図には中筋遺跡の名はみられない。あやうく知られることがなく姿を消すところであった遺跡である。

昭和57年、白鳥町大字阿多岐地内では場整備が行なわれた際、字中筋・中筋で多量の縄文土器片・石鎚などが出土した。たまたま東京から盆休みに訪れた人がそれを目撃し、帰省して文化庁に通報した。こんなことから遺跡の存在は知られるようになったのである。

文化庁から連絡を受けた岐阜県教育委員会は、早速埋蔵文化財の有無を照会し、同年11月12日、県文化課波多野主事・農地計画課荒井係長・県事務所原田課長らが現地調査を行なった。その結果遺跡の存在が確認され、現場は埋め立て保存されることになった。

今回拡張工事が行なわれる県道は、土器等が出土した地点から50~200m程南東を通る。若干離れてはいるが、岐阜県八幡土木事務所と県教育委員会との協議の結果、発掘調査の必要性があると判断された。平成4年9月16日、当センターは調査の委託を受け、八幡土木事務所と「発掘調査の時期・期間・方法」について協議を行なった。これに基づき、平成4年10月19日から11月25日までの期間に発掘調査を行なった。

II 位置と環境

岐阜と福井の県を分かつ白山連峰。その東麓を、源を発したばかりの長良川が、狭長な砂礫台地段丘を形成しながら南へ流れている。長良川をはさんで鷲ヶ岳(1671m)が白山連峰と対峙している。孤としてそびえるこの山はかつて雲ヶ岳と呼ばれ、ここに住む大鷲を地元の豪族が退治したという伝承が残っている。中筋遺跡は鷲ヶ岳の南南西約10km、阿多岐川の左岸に位置している。

鷲ヶ岳は白山火山帯の東端に位置する角閃石輝石安山岩性の火山である。火山噴出物はその南西麓に厚く堆積し、高鷲村明野に広大な高原を形成している。近年、スキー場、ゴルフ場、別荘地などのリゾート開発が進んでいるが、確かにここでは明媚な景観が得られる。台地の南端に立つと、遠く長良川、白鳥の町並が眺められる。そして眼下には、箱庭のような盆地に阿多岐の集落が、静かに、確かな息遣いで営まれている。

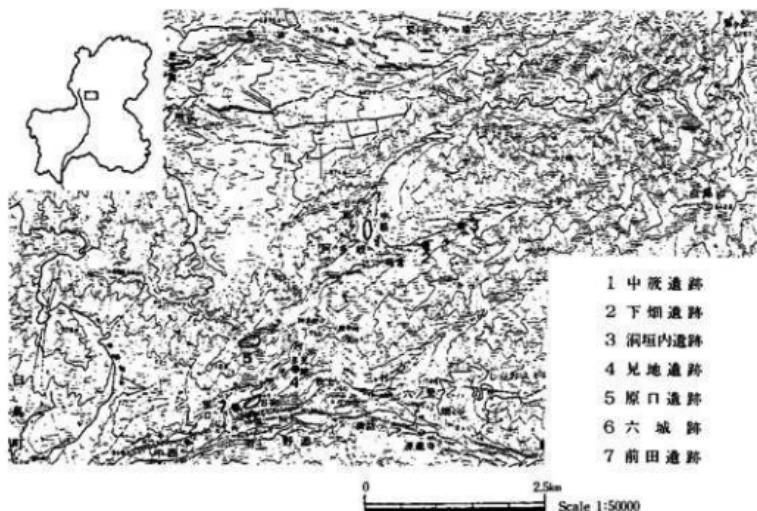
阿多岐の盆地は壠り鉢状の地形を呈しており、広くひらけてはいるが平坦な面は少ない。この盆地は、河川の侵食と堆積によって形成された河床盆地ではないようである。調査区のトレントでも付近の地層の露頭でも、河川による堆積層は見あたらぬ。むしろマールと呼ばれる火山地形としてとらえられそうである。

当地域には、阿多岐層と呼ばれる珪藻を含む地層が分布しており、地下資源として採掘され

ていた。阿多岐の珪藻土は、水蒸気やガスの爆発的噴出により造られた小火口に水が溜り、そこに繁殖した珪藻が、再び堆積して化石となったものである。このことから、新生代第三紀まではこの地域一帯は湖か沼地であったと考えられる（郡上郡郷土誌編集委員会 1962）。

この盆地内を、鶩ヶ岳より発する阿多岐川と白尾山より発する板倉川という二つの河川が勢いよく音を立てて流れ、盆地の南部で合流する。河岸段丘は川沿いに狭長なものが見られるに過ぎない。調査地は、阿多岐川と板倉川に挟まれた白尾山から西へ伸びる丘陵の端部斜面で、標高は650~670mのところにある。

遺跡発見のきっかけとなった遺物出土地点は、阿多岐川が形成した段丘上であったと思われる。出土した遺物はほとんど散逸してしまったが、その一部を白鳥町教育委員会の田代恵次課長補佐に実見させていただいた。2図はその資料の一部である。白鳥町の縄文遺跡はほとんど

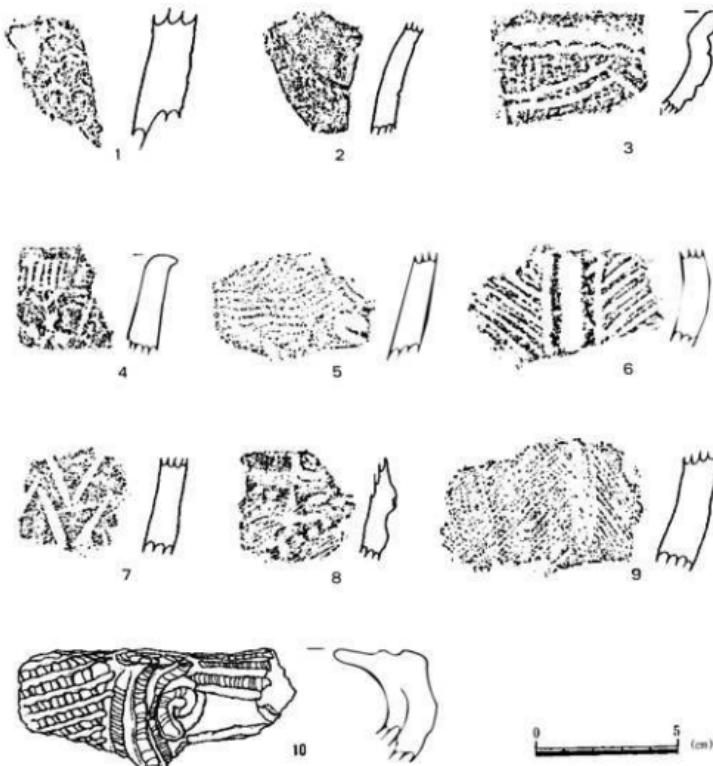


1図 遺跡周辺の地形

縄文中期に属する（白鳥町教育委員会 1976）が、当資料もそれに準ずるであろう。阿多岐川の河岸段丘上には縄文中期に集落が営まれていたと考えて良いであろう。

その資料中に数点、早期の土器も見られる。1は橢円押型文を施した高山寺式の土器片である。厚手で繊維を含んでおり、階段状の節理で割れている。2は茅山下層式の土器片である。指により浅いナデ状の凹線を施し、凹線の縁辺に縄文に似せた刺突を施す。やはり胎土に繊維を少量含んでいる。

石器では、凝灰岩製の打製石斧数点に砂岩製の打製石斧1点、凝灰岩製叩き石、砂岩製切目



2図 中筋・中筋表面採集遺物

石錐などがある。剥片は多くが石英安山岩製である。岐阜県益田郡下呂町の湯ヶ峰で産出することから下呂石と通称される。本報告書でも下呂石という名称を用いる。剥片は下呂石の他にチャートもみられるが、その比率はほぼ5:1と下呂石が多い。剥片素材の石器は石鎚と石錐があるが、その石材比率は下呂石とチャートがほぼ2:1である。

製品よりも剥片に下呂石の割合が多いということは、当地域では下呂石が製品段階で持ち込まれたのではなく、剥片か、それ以前の段階で持ち込まれたということを物語っている。下呂石は当然搬入品であるが、チャートも阿多岐の盆地内では採取出来ないことから、長良川流域あたりからの搬入品であると考えられる。どちらの石材も搬入品であり、下呂石の数量的優位は石器原材としての下呂石選択を意味する。

周辺の他の遺跡としては、板倉川流域の洞垣内遺跡(G15S06641)が知られている。板倉川が右へカーブする内側の右岸段丘上に位置している。やはり縄文中期の土器が大量に出土しており、石器は凝灰岩製の石冠・独钻石・打製石斧・下呂石製の石鎚・剥片・チャート製の剥片等が見られるが、やはり下呂石が目立つ。

同じく板倉川の流域、洞垣内遺跡から800m程下流、川が左へカーブする内側の左岸段丘に下畠遺跡(G15S06640)がある。少量の土器片が採集されている。

III 調査方法と基本層序

県道拡張面積はおよそ660m²であるが、工事予定地内では現在耕作中の水田・ビニールハウス、使用中の用水路・側溝・宅地がある。そのため、全面発掘を行なうことは困難である。また、昭和57・58年度には場整備・水路改良が行われた際、調査区内も原地形が大きく改変されている。しかも、前述のとおり阿多岐盆地の地形は平坦面が少ないため、改変の度合いが大きい。したがって全面発掘の前にトレーンチを入れる必要があるとして、3図のように6カ所のトレーンチを設定した。

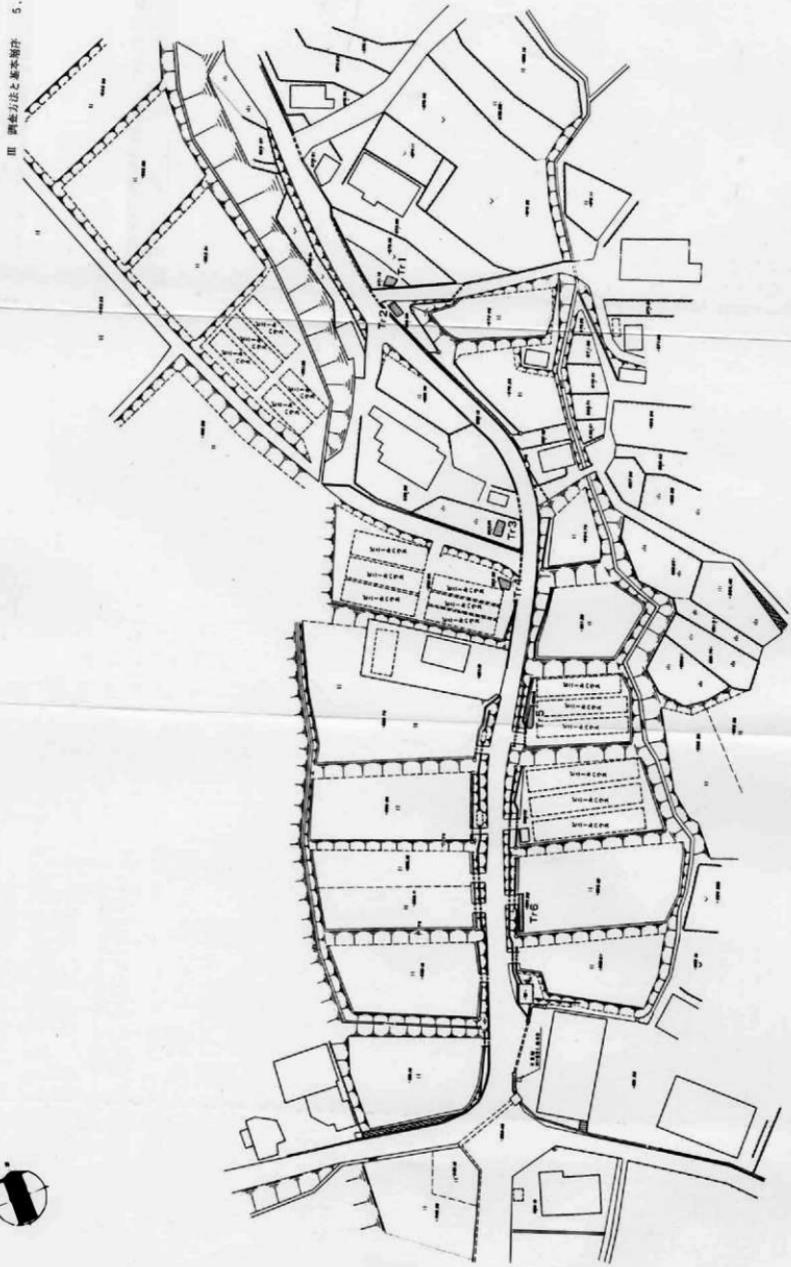
トレーンチは、北から南へ順に、第1トレーンチ、第2トレーンチ、………と称する。掘削はすべて人力によって行い、埋め戻しにはバックホーを用いた。第6トレーンチが巨礫と湧水のために完掘できなかった以外は、すべて基盤層まで完掘した。

基本層序は4図に示した。

I層は現代の耕作土・埋め立てによる客土であり、下層とは不整合を呈する。I層はさらにIa・Ia'・Ia''・Ib・Ic層に細分層できる。Ia層は黒色シルト質の耕作土。全トレーンチにみられるが、層厚は10~60cmとトレーンチによって異なる。Ia'・Ia''層は水田地に設定した第3トレーンチ・第6トレーンチにみられる黒色シルト質土。Ia層と同質であるがIa'層は固く縮まり、水田の「敷」として固められたものである。層厚は10~20cm。Ia''層はIa'層と比べて縮まりが

38图 年度4年度 中西町新トレンチ完成図

III 調査方法と基本測定 5、6



ない。第3トレンチでは層厚30~40cm。第6トレンチでは130cm程掘削したが径100cmを越える巨礫がゴロゴロ出土し、湧水も重なったため完掘できなかった。Ib層は第2トレンチにみられる暗褐色シルト質土。ブロック状の黄褐色粘質土がまだに混入し、径50cmほどの亜角礫が立った状態で検出された。層厚は10~40cm。Ic層も第2トレンチにみられる黒色シルト質土。層厚は10~20cm。下層との層面が重機のバケットの形を呈することからIb・Ic層とも埋立による客土であると思われる。

II層は第2トレンチ・第5トレンチにみられる黒灰褐色疊混じり砂質粘土。平均礫径2~5mm、最大29mmの安山岩・ディサイト質の岩片がびっしり入るが、ローリングを受けたトロトロの円礫である。ぼろぼろのくさり礫で、黄白色を呈す。火山に起因しない堆積物がみられないことから、火碎流等の火山噴出物が二次堆積したものであると思われる。層厚は第2トレンチが20~30cm。第5トレンチが10~40cmである。

III層は第5トレンチのみで確認された黒色シルト質粘土。黒ボク化が進んでいる。II層にみられるような岩片もあるが、かなり疎らである。安山岩製の剝片・チャート製の石器未製品が各1点出土しており、遺物包含層の可能性がある。当層の下部よりIV層にかけて炭化物が若干の集中をみせながら検出された。層厚10~15cm。

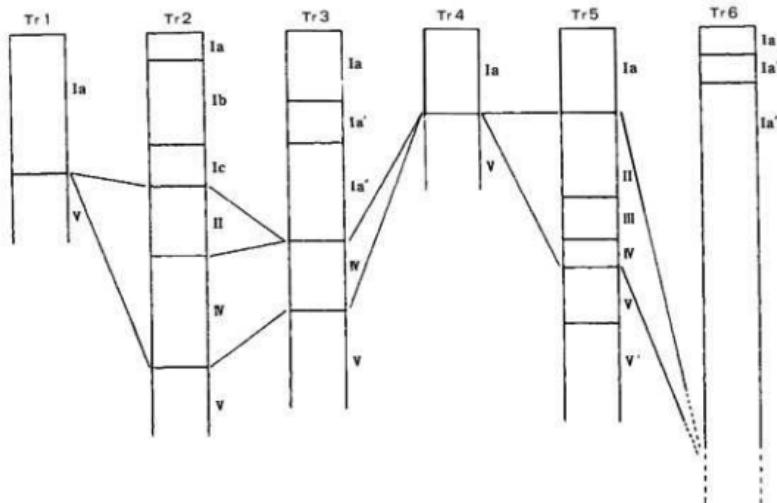
なお、当層において検出した試料をもとに¹⁴C(放射性炭素)年代測定を(株)パレオ・ラボに依頼した。その結果、8460±140(B.P.)という縄文時代早期に相当する年代が得られた。後に考察を加える。(GaK-16731。年代値の算出には¹⁴Cの半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用した。)

V層と同質のシルト質粘土であるが、色調が上層の影響を受けているものをIV層とした。第2トレンチ・第3トレンチ・第5トレンチで確認されるが、第2トレンチでは赤褐色を呈し、第3トレンチ・第5トレンチでは暗褐色を呈する。各トレンチでV層の礫の混入状況が若干異なるがIV層もそれに応じて異なる。層厚は10~40cm程度。

V層は本調査区の基盤層で、カマ土と呼ばれる黄褐色粘質土。新生代第三紀鷲ヶ岳火山岩類に属する安山岩・ディサイト質の円礫を含むローム層である。V'層はV層と土質・色調似るが、礫がボロボロに風化した砂質土が混じる。

遺跡周辺で地層の露頭を観察すると、安山岩・ディサイトを多く含む角礫岩層が阿多岐層(前述の珪藻土を含む層)の上に見られる。これと同一の母岩を主とする層が地滑り状態で二次堆積した。これがIV~V'層である。その上部が土壤化し、III層が形成される。そのうえに再び火山起源の堆積物が二次堆積したものがII層である。

第1トレンチ・第4トレンチではII~IV層が削平され、第3トレンチではII・III層が削平されている。第2トレンチ・第5トレンチでは削平がII層以上で留まっているが、第2トレンチではIII層がみられない。第6トレンチではIa*層以下不明である。



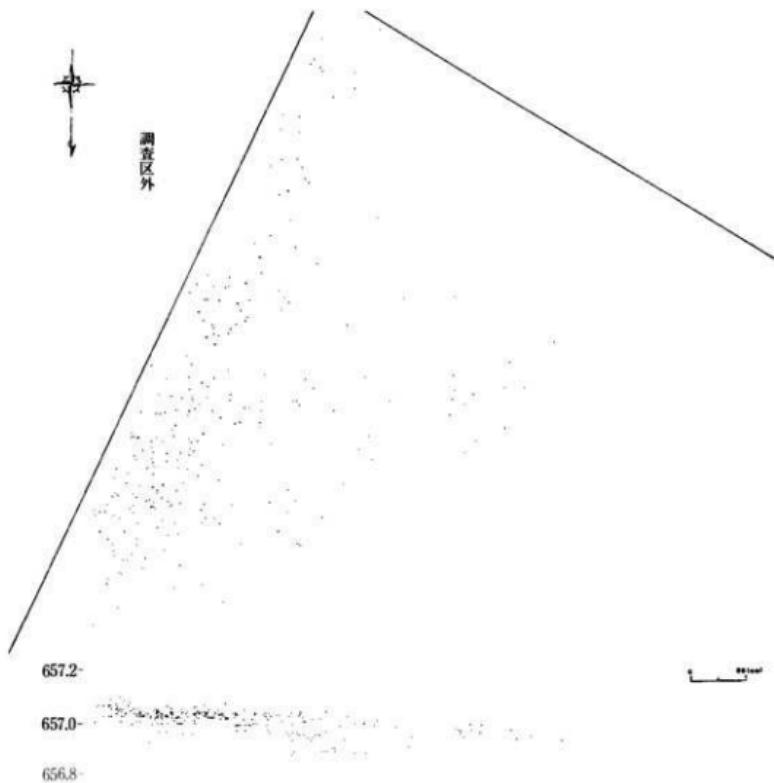
►¹⁴C年代測定用試料採取位置

4図 中液遺跡地層柱状図

IV 遺構

第5トレンチの南部、Ⅲ層下部からⅣ層にかけて炭化物の集中部が検出された。最大限トレンチを広げたが分布は調査区外にまで広がる。そのため分布の範囲を抑えることができず、径2 m以上の範囲に広がるとしかとらえられなかった。分布の密な部分では1cm当たり1~2点ほど検出できる。周辺に焼け跡・焼土は見あたらない。Ⅲ層より出土した2点の石器も炭化物集中部付近にあったが、やはり被熱の痕跡は認められなかった⁽¹⁾。

(1)火山ガラスのハイドーションによって被熱の有無を調べる。という試みが檀原徹氏によつてなされている。当遺跡の試料は火山ガラスが微量なため、被熱の検証はできなかつた。



5図 第5トレンチⅣ層上面炭化物集中部

V 遺 物

1. 遺物の出土状況 遺物の出土点数をトレンチ毎に見てみると表1のようになった。第2トレンチと第6トレンチに出土の中心があり、第4トレンチでは何も出土しなかった。また、中世と近世の遺物の出土状況に若干の偏りがあることも読み取れる。すなわち、標高の高い位置に設定された第1トレンチ・第2トレンチでは中・近世の遺物17点中、近世のものが11点で約64.7%を占める。この傾向は第3トレンチまで含めると22点中15点で約68.2%となる。一方第5トレンチ・第6トレンチでは14点中6点で約42.8%と割合は逆転する。

もちろんこれらの遺物の出土層は、ほ場整備の際に大きく動かされている極めて不安定な層である。点数も少ないことから、この傾向から何かを導き出すことは難しい。

	石 器	土 師 器	山 茶 碗	瀬 戸 美 濃 常 滑	近 世 陶 器	そ の 他	計
Tr-1	1		3	1	2		7
Tr-2		1		2	8	1	12
Tr-3				1	4		5
Tr-4							0
Tr-5	(2)		2		1		5
Tr-6		1	4	2	5		12
計	3	2	9	6	20	1	41

表1 各トレンチ毎の出土点数

無印はI層出土。()はII層出土。

2. I層出土の遺物

今回の調査で出土した遺物のほとんどは耕作土であるI層から出土した。大部分が中近世以降の遺物である。(6図)

石器

縄文時代の遺物として、第1トレンチIa層から下呂石製の剥片が1点出土した(1)。背面下部に見られる面はリングがゆるやかにまわっており、この面の打点はやや遠い位置にあると思われる。また、打角は45°と幾分緩角度であり、背面下部の面は打面とほぼ平行関係にある。したがってこの剥片は、薄い剥片状のものから剝離されていることが分かる。何らかの石器製作・調整に伴う碎片であると思われる。風化は浅く、黒灰色に鈍く光る。

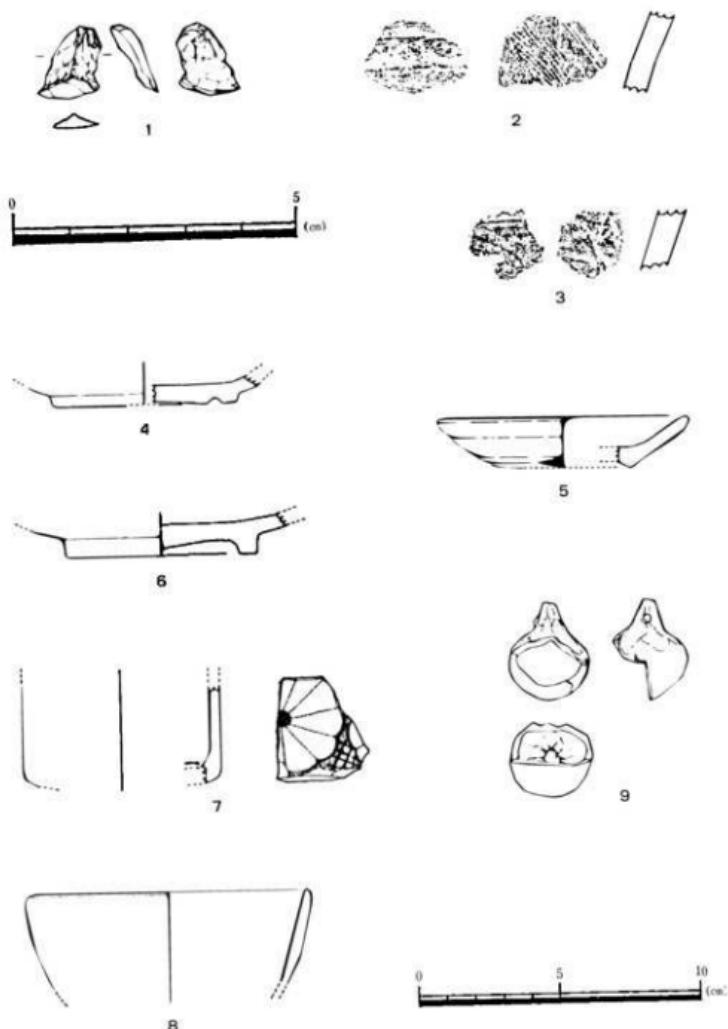
古墳時代以降の遺物

土師器は2点出土した。2は第6トレンチIa層から出土したもので、表面はよく磨かれ、歯の先端が平坦な櫛状工具によって調整されている。器厚は約5mm程度、胎土には1~2mmの白色の粒子を含む。内面はヘラミガキによって丁寧に調整されている。3は第2トレンチIa層から出土したもので、器厚は約8mm程度。胎土には1mm程度の白・赤色の粒子が少量見られる。内面にはヘラミガキが認められる。どちらも摩耗しており、小片のため時期は限定できない。

中世の遺物としては山茶碗が9点、瀬戸美濃陶器が5点、常滑焼が1点確認された。ほとんどが子指の先程の小片で、かなり摩耗が激しい。4は山茶碗の皿である。山茶碗はすべて皿類であった。5は瀬戸美濃陶器の丸皿である。推定の口縁は径7cm程度で口縁部の釉が使用のために剥落している。瀬戸美濃陶器も全点皿類である。他に、常滑焼の甕の頸部が1点確認された。

近世の遺物としては、陶器類が20点出土した。6は碗の底部である。輪トチンの跡を残し、一部に釉薬が付着する。7は連房IV(19世紀前半)の、いわゆる太白碗である。菊花つなぎの文様がみられる。8は天目茶碗の口縁部で、推定の径は約10cm程度である。内外面とも鉄釉で、茶色の発色をみせる。天目茶碗は3点出土しているが、内面灰釉・外側鐵釉のものも1点見られる。

土製品として、第2トレンチIa層から土鈴が1点出土した(9)。現代の土鈴は型を用いて作られているが、出土した土鈴は手びねりで製作されており、割れた内面には粘土紐と、ひねった跡が見られる。形状はやや肩の張った球型で、径27mm、高さ34mmと小型である。まず球型の胸部を作り、上端部に粘土紐を入れてひねり上げ、「鎧」に仕上げている。ひねりは右向きである。胸部下部は鈴口で半割しているが、割れた箇所に鈴口を切った跡が残る。鈴口は2mm程度の幅で下半部に走っていたようである。紐穴は鈴口と平行に穿孔されている。当品のような小



6図 1層出土の遺物

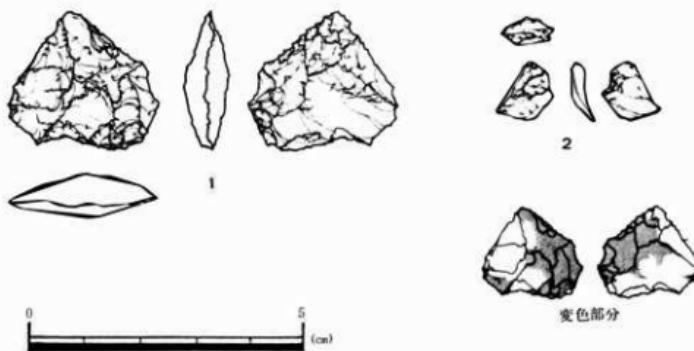
型の土鉢は、複数で用いられる時、一本の紐で数珠なりで吊り下げられるタイプとさくらんばのように各土鉢が一本ずつの紐で吊り下げられるタイプがある。数珠なりで吊り下げられる土鉢は鉢口と紐穴がねじれの位置に設けられることから、この土鉢はさくらんばタイプの1点であると思われる。

トレンチからは、他に現代の陶磁器類・年代不明の擂り鉢等が出土している。

3. III層出土の遺物

II層以下の層から出土した遺物は、第5トレンチIII層の剥片1点、石器の未製品1点の2点である（7図）。

1は灰青色を呈するチャート製の石器未製品である。右図下部にポジティブな面が観察されるが、主要剝離面と考えて良いであろう。両面に、概して粗い調整が施されているが、主要剝離面側の調整剝離面にはバルブがほとんど残っておらず、背面側の調整剝離によって切られている。したがって、まず主要剝離面側に調整を加え、その後背面側に調整を施したと考えられる。形状は五角形に近い不定型な三角形を呈し、その一つの頂点は尖頭部を意識している。長さ25.5mm、幅27.1mm、最大厚7.7mm、重量4.9gである。形状・大きさから石鎚の未製品であると思われるが、調整によって厚さを減すことができず、製品として完成することができなかつたのであろうか。実体顕微鏡で観察したが、使用痕は認められなかった。両面の最も分厚い部分が黒褐色に変色しているが、タール状の付着物なども被熱による表面の変化も認めることはできなかった。土色の影響による変色であろうか。



7図 第5トレンチIII層出土石器

2は下呂石製の剥片である。細かな打面調整を施し、ほとんど点状打面になっている。背面下部と左側縁にみられる剥離面は、リングがゆるやかにまわることから、素材の剥離面の一部であると思われる。打面と背面下部の剥離面はほぼ平行であり、その間の距離は5.1mm。この厚さの板状の素材（剥片であろうか）から剥離されたものである。何らかの石器を製作した際の調整剥片であろうと思われる。幅9.0mm、厚さ2.0mm、重量2.2g、打角は38と緩角度である。風化の度合いは浅く、黒灰色の鈍い光沢が残っている。使用痕は認められない。

VI まとめ

1. 調査の概要

平成4年度の発掘調査によって計6カ所のトレンチを設定したが、ほ場整備の際に削平を受け、遺物包含層が確認されたのは第5トレンチⅢ層のみであった。遺構としては炭化物集中部が確認されたが性格不明であり、遺物も石器の未製品1点、剥片1点が出土したのみであった。

2. 下呂石のあり方

しかし、今まで報告されることがなかった資料を、一部ではあるが紹介できたことは成果であった。繩文中期を中心とした資料であるが、特に石器石材について興味深い様相がみられる。すなわち、当調査区から直線距離で40km近く隔たり、川筋も異なる湯ヶ峰の山麓に産する下呂石が大量に持ち込まれているのである。

白鳥町において、少からず有舌尖頭器の出土が報告されているが(白鳥町教育委員会 1976)、そのほとんどがチャート製である。また、郡上郡内では長良川中流域の美並村において発掘調査報告書が刊行されているが(美並村教育委員会 1988)(岐阜県文化財保護センター 1992)、やはりチャートが石器石材の主体を占めている。阿多岐川流域における下呂石の卓越が、地域的な現象であるのか、それとも時期的な現象であるのか。それを明らかにする必要があるであろう。しかし、それ以前の問題として、当資料が表面採集によって得られたという資料的な限界がある。下呂石の卓越が発掘資料によって確認されることがなによりも必要である。

また、下呂石がどのような形で搬入されているのか。さらにはその剥片剥離のあり方等が検討されれば、下呂石の広がりを一つの文化圏、もしくは交易圏としてとらえることができるであろう。

3. 遺跡の年代

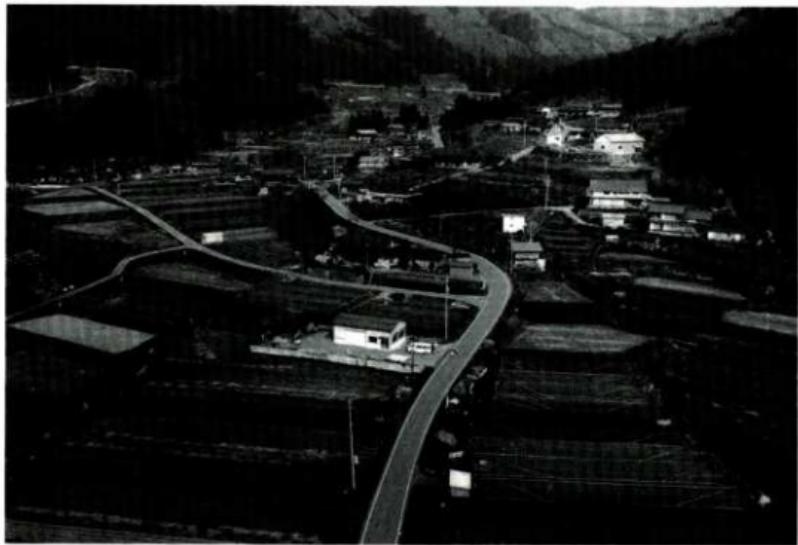
唯一包含層が確認された第5トレンチⅢ層において放射性炭素年代測定を行った。試料はⅢ層上部においてサンプリングした。その結果、 8460 ± 140 (B.P.)という年代が得られた。繩文

時代早期に相当する数値である。周辺での表面採集資料の中にも、中期の土器片に混じって数点の縄文早期の土器片が見られることから、縄文早期の包含層と判断して良いであろう。現在の阿多岐川からやや離れた斜面上で、早期に生活が営まれていた可能性がある。早期の生活域と中期の生活域のあり方について、中期の包含層が確認されたならば、明らかにすることも可能になるであろう。

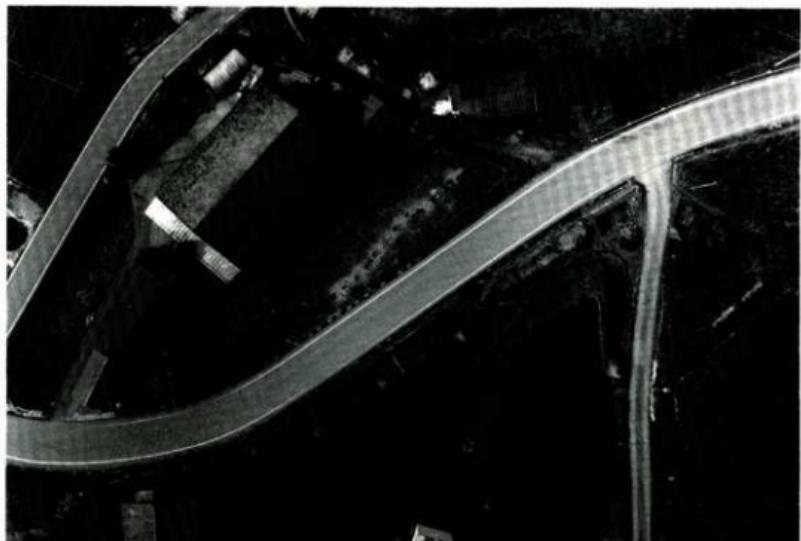
以上、今後の課題を述べるという形で研究の進展を願い、まとめにかえたい。

引用・参考文献

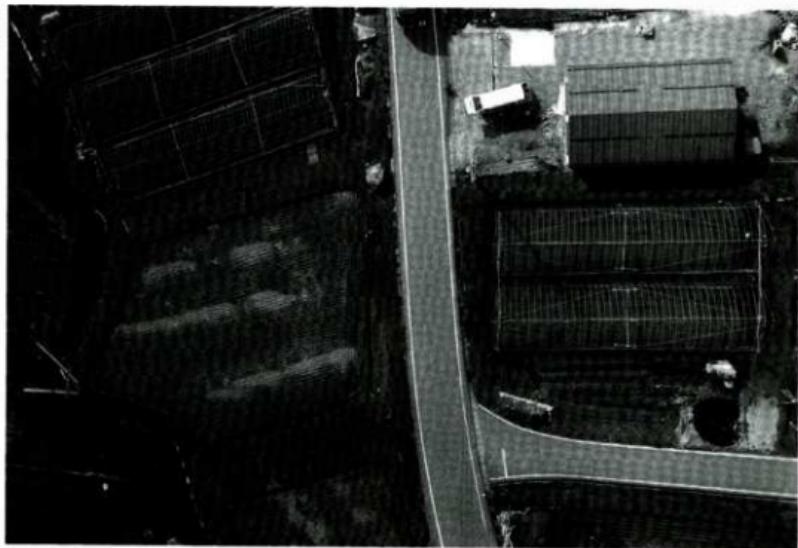
- 梶田澄雄 1980 「阿多岐のケイソウ土」『日曜の地学 110 岐阜の地層をめぐって』築地書館株式会社
- 上村俊邦 1992 「阿多岐地区は場整備」『土地改良史 白鳥町昭和の整田』白鳥町
- 紅村 弘 1981 「東海先史文化の諸段階（本文編）補足改訂版』紅村 弘
- 紅村 弘 1977 「東海先史文化の諸段階（資料編1）』紅村 弘
- 岐阜県教育委員会 1991 「第三章 小の原遺跡の遺構・遺物」『小の原遺跡・戸入障子墓遺跡』岐阜県教育委員会
- (財)岐阜県文化財保護センター 1992 「IV、遺構と遺物」『宮下遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター
- 郡上郡郷土誌編集委員会 1962 「第一章 三、土地のおいたち」『郡上郡郷土誌』
- 白鳥町教育委員会 1976 「第一章 第二節 自然環境」『白鳥町史』白鳥町
- 白鳥町教育委員会 1976 「第二章 白鳥町の歴史」『白鳥町史』白鳥町
- 名古屋大学考古学研究室 1974 「白鳥町の遺跡」白鳥町教育委員会
- 北国新聞白山総合学術調査団 1962 「火の山・白山 失われた湖」『白山』北国新聞社
- 美並村教育委員会 1988 「第四章 出土遺物」『稲葉遺跡』美並村教育委員会

図版
1

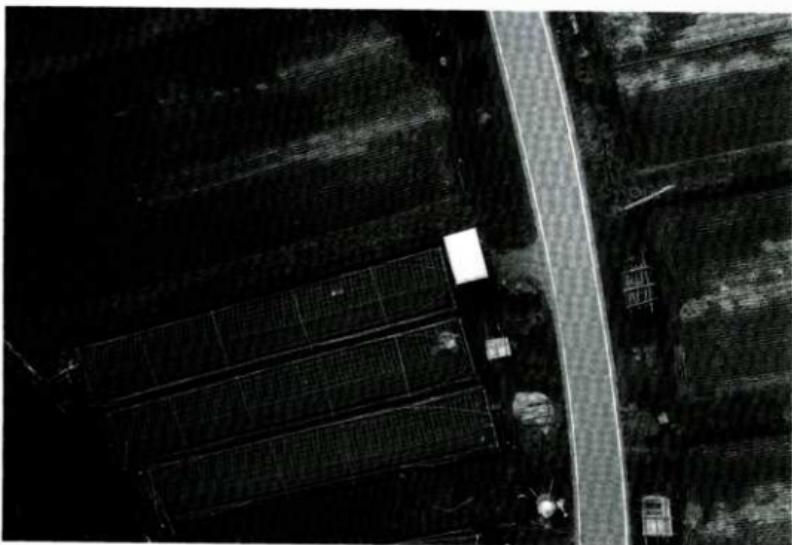
調査区 遠景（南から）



第1・2・3トレンチ

図版
2

第3・4・5トレンチ



第6トレンチ

図版
3

第5トレンチ完掘状況（北から）

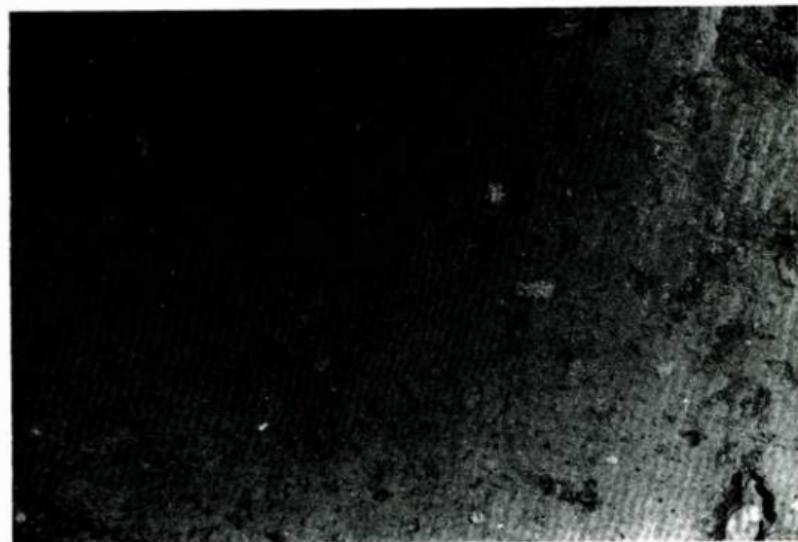


第6トレンチ（北から）

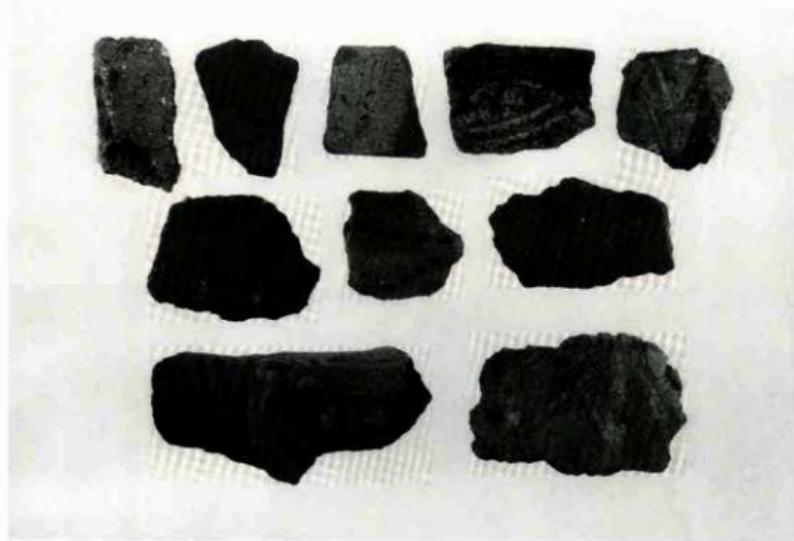
図版
4

作業風景

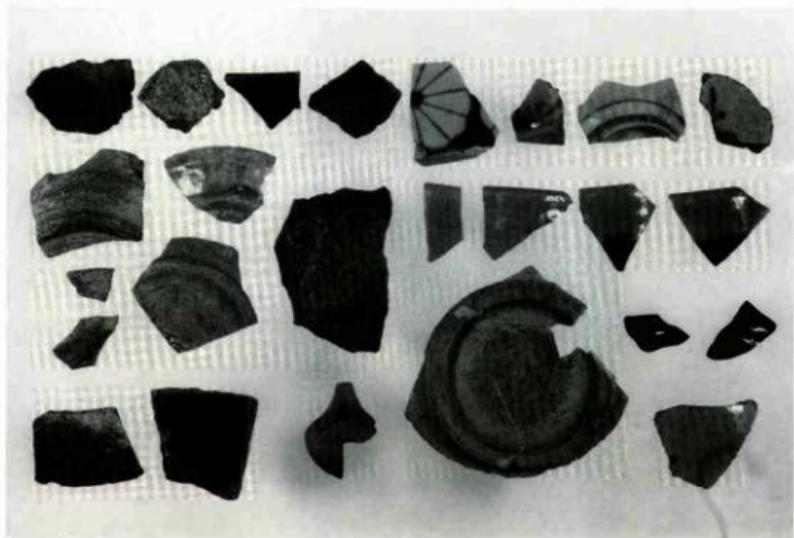
5



第5トレンチ炭化物集中部

図版
5

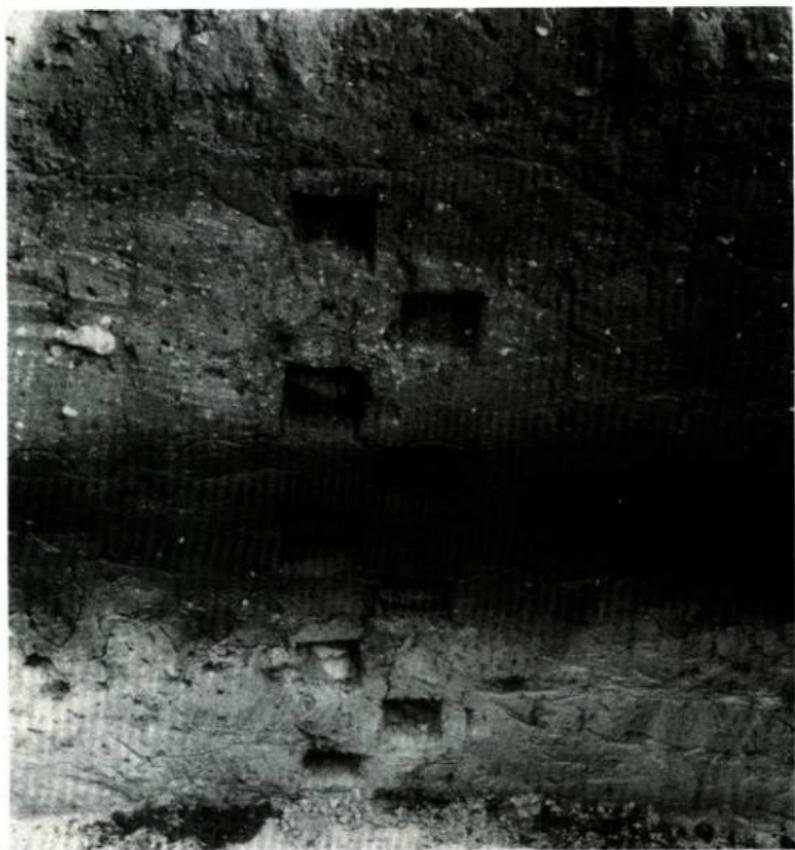
中段遺跡表面採集遺物 1/2



1層出土の遺物 1/2

図版
6

田屑出土の遺物 1/1



第5トレンチ東壁セクション

文献データシート

書名	岐阜県文化財保護センター調査報告書 第10集 中篋遺跡
執筆者	長屋 幸二
発行者	財團法人岐阜県文化財保護センター
発行年月	1993年3月
遺跡名	中篋遺跡
説み	なかおさいせき
所在地	岐阜県 郡上郡 白鳥町 大字阿多岐 字中篋
調査原因	一般県道駄立恩地線改良事業に伴う
種別	散布地
時代	縄文

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第10集

中 篋 遺 跡

1993年3月31日印刷
1993年3月31日刊行

編集・発行 岐阜県本巣郡穂積町牛牧宮下395
財團法人 岐阜県文化財保護センター
印 刷 昭 和 印 刷